



TITLE:

# カール・ポパーと経済学方法論について

AUTHOR(S):

吉田, 和男

---

CITATION:

吉田, 和男. カール・ポパーと経済学方法論について. 経済論叢 1990, 145(3): 293-312

ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/139256>

RIGHT:

## カール・ポパーと経済学方法論について

吉 田 和 男

### I ポパーの反証主義

Popper は1934年の処女作“Logik der Forschung”（英訳 Popper (1959)）においてウィーン学団の論理実証主義を批判して、反証主義の立場を表明する。以降の著作 Popper (1950), (1957), (1963), (1972) などにおいて科学と非科学を切り分ける境界問題として反証主義の立場を確立し、科学哲学史上で重要な位置を占めている。ポパーは「科学においては究極的な言明はありえない。……原理上、論破することのできぬ言明はひとつもない」<sup>1)</sup>として、科学は「経験的テストの手段によってネガティブな意味で選別されうような論理形式をそなえているべきだ。……そして、経験科学にとっては反駁されうることが可能でなければならない。」<sup>2)</sup>とする。この反証可能性をもって科学と形而上学の間に明確な線引きを行なう。ここで、反証とは「理論を反駁する再現可能な結果を発見した場合だけ、われわれは理論が反証されたとみなす。」<sup>3)</sup>としてゐる。科学者には「大胆に理論を提唱し、それが誤っていることを示すために最善を尽くし、われわれの批判的な努力が成功しないときにそれを暫定的に受容する。」<sup>4)</sup>という努力を要求する。この結果、科学は批判によって各思想が自由に競争を行うことで発展して行くとする。すなわち、「われわれが自分の誤りから学ぶこと、すなわち自分の錯誤を認めて、誤りを独断的に固執する代わりにそれを批判的に利用する。」<sup>5)</sup>と批判の役割を示し、「科学を批判によって

1) Popper (1959) 訳書（上）57—58頁。

2) *op. cit.*, 49頁。

3) *op. cit.*, 106頁。

4) Popper (1963) 訳書88頁。

5) Popper (1957) 訳書135頁。

説明する。科学は、蓄積によってではなく、むしろ革命的方法によって一科学のもっとも重要な道具、つまり神話や理論が定式化される言語、を含む全体を破壊し、変化させ、変更する方法によって一進歩する。』<sup>6)</sup> とする。この結果、「知識の成長は古い問題から新しい問題へと、推論と反駁の手段によって、進む」<sup>7)</sup> と進化論的な科学の発展を主張する。

このような Popper の反証主義の考え方は、科学哲学の論争の中で一つの確固たる地位を築き、ハチソンなどによって経済学の世界にも導入された。特に、Samuelson (1947) は「私は意味のある定理という言葉を、単に理想状態のもとでのみ反証が可能な経験的データについての仮説という意味で使っている。」<sup>8)</sup> と反証可能であることが経済学上の意味のあるものとして、反証主義に裏付けられた経済学研究の確立を主張した。一般に、経済学の世界で行われる、仮説を立て、これから演繹される定理を導き、これを統計的に検証するという論文のスタイルが確立する。ピース・ミールと反証可能性の立場の導入は経済学を物理学など他の自然科学と同様の科学としての体裁を整え、確固たる地位を形成して、佐和 (1979), (1981) の示すように、アカデミック・ジャーナルを中心にして経済学が制度化されて行く。この結果、新古典派経済学は戦後の米国の経済学界に於て主流となって発展し、社会科学の女王として君臨することになる。

Samuelson とは多くの場合、対立する議論を行った Friedman (1971) は、この議論に関してはもっと徹底した方法論（科学哲学としては厳密とはいえずポパーの立場とは必ずしも一致しないが）を主張し、「“正しい” 経済政策についての合意が、……広く受け入れられ、また、受け入れられるに値する結論を生み出す実証経済学の進歩に依存しているということである。」<sup>9)</sup> と実証経済学の重要性を説き、「仮説の妥当性に関する唯一の適切なテストは、その予測と

6) Popper (1963) 訳書210頁。

7) Popper (1972) 訳書290頁。

8) Samuelson (1947) 訳書5頁。

9) Friedman (1971) 訳書6頁。

経験と比較することである」<sup>10)</sup> として、すべての理論はその予測力によって評価され、テストされるべきであると言う。Samuelson の考えに近くない post-Keynesian のグループにおいても、例えば、Robinson (1962) は「形而上学の命題の形而上学的命題たるゆえんは、その真偽を確かめることが出来ない点にある。……また、その命題は、誤謬を証明することが出来ない性質のものである。」<sup>11)</sup> と、Popper の反証主義の立場を支持し、この立場から新古典派経済学は反証されたと攻撃する。

いずれにせよポパーによって与えられた科学の体裁を具備した経済学、特に新古典派経済学は方法論的な確立によって大きく発展したことは間違いない。しかしながら、今日、経済学の危機が叫ばれて久しく、現実には、経済学が魅力的なものでなくなってきたという危惧が広がっている。また、一方では、科学的な立場についての誤解も少なくない。反証主義と経済学の方法についてポパーの原点に立ちかえて考えてみることにしたい。

## II 仮説について

まず、科学の出発点は仮説の提起である。ポパーの反証主義の立場を明確にした新古典派経済学はこの仮説または仮定を提起し、これを論理的、多くの場合数学的な演繹を行い、この結論について統計学的手法により実証分析を行なうという手続きを構成することになる。ここで、まず議論となるのが仮説の置き方である。伝統的なデカルト＝ニュートンの方法は既知あるいは立証済みの原理を前提として演繹的に推論し、これによって観察されているが説明されていない現象を説明するというものである。これはA. スミスによって経済学に導入され、以来経済学の伝統的な方法となってきた。そこで、経済学は仮説から始まるが、これは直ちにその現実性が議論となるのが常であった。しかしながら、Popper の反証主義の方法はこれを大きく変更し、現実性は仮説でなく、

10) *op. cit.*, 9頁。

11) Robinson (1962) 訳書5頁。

テストにおいて議論されるべきとする。そして、新古典派経済学の議論の多くでは、公理的な仮定、一見非現実的な仮定をおくことが普通のこととなった。

これについて、Popper (1972) は「我々の観察は……極めて複雑な、そして驚くほど優れているが必ずしも信用のおけない、解説である」<sup>12)</sup> として、直接的観察を出発点として選ぶことを拒否する。そして、Popper (1957) は、あらゆる仮説はテンタティヴなものであって、どうしても良いものだと述べる。彼は『「まず、どのようにして理論を見出したのか」』という設問は、いわば全く私事に属するのであり、それに反して、その置き方は『「どのようにして理論をテストしたのか」』という設問だけが科学に関連するのである。』<sup>13)</sup> と、反証されるかどうかだけが科学に関する問題であると主張する。

また、Popper (1963) は「観察の機能は、理論を生み出すことではない。それが果たす役割は、理論をしりぞけたり、除去したり、批判したりすることにある。』<sup>14)</sup> として、経験と仮説は無関係であるとして経済学における公理的扱いの方法を支持する。

Friedman (1971) はこれを極端な形で表明する。「理論の“仮定”について問われるべき適切な問題は、それらの仮定が記述的に“現実的”であるかどうかではなく、というのは決して現実的でないからであり、当面の目的にとってそれらの仮定がじゅうぶんに良好な近似であるかどうかということである。』<sup>15)</sup> そして「この問題は、理論が働くかどうかを、つまり、その理論が十分に正確な予測を生むかどうかを、見さえすれば答えることができるのである。』<sup>16)</sup> すなわち、結果であって、仮定の現実性ではないのである。「一般にその理論が有効であればあるほど、（この意味で）仮定はいっそう非現実的である。』<sup>17)</sup> と断言する。仮定はいずれにせよ恣意性から逃れられないので、現実

12) Popper (1972) 訳書85頁。

13) Popper (1957) 訳書204頁。

14) Popper (1963) 訳書207頁。

15) Friedman (1971) 訳書207頁。

16) *op. cit.*, 15頁。

17) *op. cit.*, 15頁。

性という意味は仮説の中に導入すべき要素ではないという議論である。経済学の専門家でない多くの人々が経済学の議論を見て非現実的であると判断するが、それはテストの時点の間違えているのであって、仮定で議論すべきでなく、結果で議論すべきというのである。

この教義に沿うように新古典派経済学では、合理主義の立場に立ち、できるかぎり一般的な公理、あるいは公理に近い仮定から経済学の定理を導こうとする。ここでは、いわゆる合理的な仮説が現実的であるかどうかは問題でなく、合理的人間行動の仮定も現実の人間が合理的であるかどうかは重要でない。完全競争の仮定は現実が完全競争であるかどうかは重要でないのである。ただ、合理主義的な立場について Popper (1957) も「疑いもなく、人間と言うものは合理的に行動することはまずない、といていい。……しかし、それにもかかわらず、おおかれすくなかれ合理的に行動するのである。そしてそのことが、人間の行動や相互の行動について比較的単純なモデルを構築することを可能ならしめるのであり、またそのモデルを近似として用いることを可能ならしめる。」<sup>18)</sup> と言い、合理主義的なアプローチを支持している。

これに対して、他のグループからは公理的な仮説からの出発よりも現実の観察から得られる仮説から議論が出発すべきであることが主張される。例えば、Keynes (1936) は伝統的な経済学を革命的に変革したのであるが、それは伝統的な経済学が合理主義の立場に拘ったものを、現実の様々な制度的、歴史的、心理的制約を彼の理論の中に取り込んだのであった。Robinson (1971) は「ケインズは『一般理論』を書き上げる時、新古典派的な考えから『逃れるために長い間にわたる闘い』を経なければならなかった。」<sup>19)</sup> と記している。そして、Keynes (1936) は、現実の観察を基礎とする Postulate を議論の出発点にした経済学を構築したのである。古典派の公準批判、限界消費性向の安定性、流動性選好、貨幣賃金の硬直性などは合理主義的な公理的な議論からではなく、

18) Popper (1957) 訳書212頁。

19) Robinson (1971)。

現実の経済の観察から生まれたものを出発点として議論が展開される。このような姿勢は、多くのいわゆる post-Keynesian に引き継がれ、新古典派に見られるような公理的な議論を攻撃することとなる。例えば、Eichner (1983) は、経済学は現実から議論されることを主張し、「経験的に検証されていない一群の公理と仮説に基づいた精巧な推論の集合体としての新古典派モデルが、いかに数学と計量経済学によって装われようとも、そこから導かれる結論は現実から遊離した虚構に過ぎない。」と新古典派を批判する。

ここから経済学は高等常識であって科学でないという議論もよく聞かれる。Eichner (1983) も『なぜ経済学は科学でないのか』と表題して、科学の体裁を作ることが経済学の目的でないとする。また、経済学の専門家以外の人々は日常の経済行動を自らの内省として理解できるものを、なぜややこしく、しかも数学を多用して分かりにくくするのかという疑問を必ずといっていいほど提示する。しかし、反証主義の立場からは、たとえ経済学が常識から発想されようとそれが実証される、あるいは反証される可能性がなければ議論にならないし、常識から発想されなくても反証可能であればよいのである。Popper (1972) は「全ての科学、全ての哲学は啓発された常識である。」<sup>20)</sup>として、常識から出発することは否定していないし、従って全てはあやふやなものから出ていることをいう。ポパーにとって重要なことは反証可能性だけである。

一方、戦後の新古典派経済学では、ケインズの提起した様々な議論をできる限り公理的な仮説から出発させるべく議論の転換が行われてきた。いわゆるマクロ経済学のミクロ経済学的基礎に関する研究である。消費性向の問題はライフサイクル仮説、オーバーラッピング・ジェネレーションズ・モデルなどの消費者の時間を含む最適化問題に置き直され、流動性選好はポートフォリオ・セレクションの危険回避の問題となり、貨幣賃金の硬直性は労働者の危険回避行動理論やエフィシエント・ウェッジの理論として再定式化されている。新古典派の行ったケインズ理論の精緻化、科学化は重要な側面であり、それはケイン

20) Popper (1972) 訳書41頁。

ズの考えを発展させる意図のものであった。これに対して、Leijonhufvud (1966)のように、このような作業の結果、ケインジアン<sup>\*</sup>の経済学はケインズの経済学でないとの主張が行われるようになる。この様に、現実からの発想を仮に公理体系の中に置き直してたととしても、公理的なアプローチに反対する人々にとっては改善されたわけではない。しかし、現実を観察として仮説を持ち出すのと、それを何等かの一般化した形で提起するのでは大きな違いがある。それは知識を操作できるという大きな利点を持つ。現実に関する記述はどの様にひっくり返してもそれ以上のことは出てこない。情報は加工すれば必ず情報量が減少する。公理的な仮定はそれを部分的に変更することで、さまざまな展開が可能になる。また、さまざまな諸定理を利用して仮説を演繹することが可能になる。すなわち、分かっていることを加えることで情報量を拡大できる。

Popper (1972) の言うように「認識する者は主観的自我」<sup>21)</sup>でしかありえず、直接、観察の記述を仮説として出発することは、実は非現実的なのである。いわゆる現実的な仮定が現実的である保証はない。また、一般的な公理的・規約的な形での仮説は様々に展開するのに適切な形を持つことができる。逆に言えば、どの様な現実的な仮説もある種の展開が出来るようにするためには非現実的な形にせざるをえない。意味のない公理をいくら展開しても意味のあることは導けないという議論は、逆に言えば、意味のある公理は展開すれば意味のある帰結を得ることができることを意味している。公理が意味があるかどうかは分からないので、これが意味を持つかどうかは帰結についての検証によらねばならないことになる。全く同様に、間違った観察から出発することで意味のある帰結を得ることはできない。観察が正しいかどうかは分からないのでテストが必要となる。いずれにせよ帰結についての検証が鍵になる。すなわち、観察から出発するか公理から出発するかはどちらでもよく、実証科学としての意味のある理論であるかどうかは帰結についてのテストでしか判別のしようがないというのが Popper の立場である。

21) Popper (1972) 訳書86頁。



しかしながら、経済学におけるどの様な仮説も現実から無関係ではありえない。Popper (1957) は仮説についてその源泉はどうでも良いこととしながらも、「それらは総合的（分析的ではなく）で経験的（先天的ではなく）であり、また情報伝達的であると思う。」<sup>22)</sup> と、仮説は総合的で経験的なものであるという主張を行なう。社会科学が経験と結び付いた仮説から出発することは Popper と矛盾するものではない。いずれにせよ、現実の経済の深い洞察によらなければならないのであって、たとえ公理的な仮定であっても現実との関わりの中で解釈されることは必要であり、経験と無関係ではありえない。例えば、完全競争や効用最大化も議論の出発として用いることは、Poincare 的な規約主義的な仮説と考えることもできるが、これも経験に基づいていることもまた間違いない。幾何学がユークリッドかリーマンかロバチェフスキーかといった問題とケインジアンかマネタリストかといった経済学の問題とは大きく異なる。

実際、非現実的であると批判がよく行われる新古典派の議論の多くも米国の現実に深く根ざしている場合が少なくない。佐和 (1982) は「アメリカ社会をとりしきるコードすなわち社会的しきたりの構造と、新古典派経済理論との間に認められる、あざやかな同型性である。」<sup>23)</sup> と指摘している。新古典派経済学の多くの仮定、例えば、完全競争、利潤極大化などの仮定は日本よりはるかに米国では現実的である。オークション、ガレージセールス、レモネード売りなど市場での競争原理は彼らの生活そのものである。最近流行の合理的期待なども、多くの企業がさまざまな統計学的方法を使って予想を行っている現実を見ると、適合的期待に比べれば極めて現実的な仮定とも考えられる。

従って、問題は新古典派経済学の仮定そのものにあるのではなく、その議論を適用して日本経済を議論する際の現実性の問題である。日本経済は米国経済とは違った側面を多く持っており、これはヨーロッパやその他の国でも同様であろう。ある特殊な経済の現実から発想した仮定を普遍的な原理として適用す

22) Popper (1957) 訳書200頁。

23) 佐和 (1982) 23頁。

るところに誤りがある。日本経済の分析には日本経済の現実から発想された仮説を基礎にした経済学が必要になる。多くの仮説は現実の観察の表現である必要はないにしても、仮説は現実から発想されていることも事実であろう。より有効な理論を生み出すための仮説は現実の観察から生まれることは否定できない。仮説は現実を記述するものではないし、Friedman の言うように、そういうものは理論としての有効性を持たないのは理解できる。しかし、現実の観察からは多くの直観を生むのである。Friedman (1971) も言うように、仮説の構築は「靈感、直観、発明のような創造的な事業なのである。」<sup>24)</sup> そして、多かれ少なかれそれを生むのは現実との緊張感なのである。

また、経済学の論争で行われる多くの仮定は議論の簡単化のためである。全てを議論することはもともと不可能であるし、狭い仮定がおかれるほど議論は明確になり、意味のある帰結を導き易い。議論の明快さと議論の制約にはトレード・オフの関係であろう。また、どの様な数学的でない論述も必ず簡単化の仮定はインプライされており、一般に、この種の仮定はインプリシットかイクスプリシットかの違いに過ぎない場合が多い。問題はその仮定が重要な現実を排除しているかどうかである。Robinson (1971) も「光を当てようとする現実の状態について、その本質を見失うことなく、分析することができるような図式を作るというのは一種の芸術である。」<sup>25)</sup> といっているが、現実に対する関心が強くなければ、この様なことはできないことであろう。

### III 反証主義の限界

次に、仮説から導かれた帰結の反証可能性について考える。社会科学において、もっとも厄介な問題は Popper も認めているようにテストに限界が存在することである。Popper (1957) は物理学と経済学を比較して、経済学の分野では「パラメーターそのものが、もっとも重要な諸事例において、急速に変化す

24) Friedman (1971) 訳書44頁。

25) Robinson (1971) 訳書227頁。

る変項なのである。このことは明らかに、測定と言うことの意義や解釈可能性、またそのテスト可能性を減殺しているのだ。』<sup>26)</sup> として、社会科学における検証の限界について述べている。検証の不安定性は一般に指摘されるところである。また、統計的手法による検証もパラメータはゼロでないという仮説を棄却できないといっているに過ぎない。事実、ケインジアンがモデルを作ればケインジアンモデルが生まれ、マネタリストがモデルを作ればマネタリストモデルが生まれる。両者の主張は水と油のごときであるが、同じ経済のデータで両者とも統計的に有意なモデルを作ることが可能なのである。様々な矛盾する議論が現実のテストによって棄却されないでさまざまなモデルが平行して存在することになる。

場合によっては、明らかに反証されているような問題に関しても経済学者はロバストである。佐和(1986)のいう「反証のがれの術」によって反証を巧みに逃れる方法を見いだすのが常であるためである。例えば、財政政策の有効性の問題について、ケインジアンがかつて主張したような有効性を現実から肯定することはできないが、ケインジアンは健在である。マネタリストも彼らの主張したような貨幣供給量と名目生産の関係について安定的な関係を見いだすことはできないが、マネタリストは健在である。このために、新古典派、ケインジアン、マネタリスト、ニュークラシカル、サプライサイド、post-Keynesian などさまざまな学派が並存する。

こうなれば、Kuhn (1962) のいうように、科学は反証で知識を進化させるのではなく、パラダイムの問題に帰着されるようなこととなってくる。物理学においてもニュートン物理学が反証されて相対性理論や量子力学が出てきたわけではないので、基本的には大きな差がないということができるかも知れないが、それにしても同じ対象について正反対の議論を行なう経済学が部外の人から異様にみられることも仕方がない。

また、Popper が繰り返し強調しているように Popper の反証主義は科学と

---

26) Popper (1957) 訳書215頁。

形而上学とを区分する境界問題に関するものであり、それ自身の意味についての判断ではない。科学としての経済学の価値が低くても、現実の経済を理解し、政策を論争するために必要な情報を提供することはそれなりに価値のあることである。Popper (1959) は「その論理形式故にテスト可能でない主張が演じるのはせいぜいのところ、科学の内部では、刺激剤としての役割である。」<sup>27)</sup>と低い評価をしているが、逆に読めばポパーもそれを否定しているわけでないことが示される。テスト可能でないリーマンやロバチェフスキーの幾何学がテスト可能な新しい宇宙観を生み、科学の新しい構想も反証可能でない形式を持つ議論から生まれることも否定できない。Robinson (1962) も「形而上学的叙述にも内容がないわけではない。それは、一つの見解を示し、行動の指標となる感情を系統だてる。……形而上学的命題は、また、仮説を引き出す際の知識の源泉にもなる。」<sup>28)</sup>としている。

社会科学では反証が難しく、また、反証不可能な議論が全く無意味なのではない場合が少なくないのである。反証主義も限界をもって考えられるべきであるし、また、反証不可能をもって意味がないともできない。

#### IV 非線形システムと反証主義

一般的に、現実的な仮定が困難である例としてあげることができるのは線形性の問題である。経済学の理論のほとんどが線形システムを仮定するか、非線形要素を含むシステムであっても結果的に線形システムと殆ど変わらないようなものを仮定している。現実が線形でないことは言うまでもない。初期値が異なれば、その動的経路や解が全く異なることが生じ、一様の動きではなく一見不規則な動きや奇妙な動きを伴うのが非線形システムの特徴である。現実が複雑な動きをするのは、経済学が非線形システムであることを示している。従って、現実を表現するためには非線形システムで示さなければならないことにな

27) Popper (1959) 訳書 (上) 123頁。

28) Robinson (1962) 訳書 5頁。

る。しかし、線形システムでなければ多くの場合、一般的に解くことは難しくお手上げになる。これはなにも数学的に表現されたものに限らない。AならばB、BならばCという一般に行われる議論も意味を持つ定理であるためには線形性を仮定することになる。すなわち、ほとんどの理論は線形性を仮定しなければならない。線形性を仮定した瞬間、議論は非現実的なものとなる。一方、非線形システムの解析を強いて行おうとすると、極めて特殊な場合に限られ、まさに解くための仮定を置くことになる。すると、その仮定は非現実的なものになる。

さらに、線形を仮定したモデルはこれを反証することは容易である。現実と線形モデルの解を比較することは極めて簡単であるが、非線形ではそうはならない。従って、反証主義は線形モデルでは意味を持つが、非線形モデルでは意味を持たない。また、ほとんどの実証研究は統計学的手法により、シグナルからノイズをふるい分けることによって、真のモデルと外乱に分ける方法が取られる。そして、システムのパラメーターの推定値を求めることが行われる。また、大きな変化が起こったときは構造変化であるとして、その変化を除外したりする。すなわち、真のモデルが存在して、シグナル以外はノイズであるという重大な仮定が置かれ、また、構造変化はシステム外の要因であり、システムは構造的に安定であるという仮定がおかれるのが一般的である。このようにすれば、現実の観察と一致するモデルがあるかも知れないし、少なくとも一致しないとは言えないことを示すことはできる。しかし、現実存在する非線形性は仮定として検証・反証の段階で除外されていることになる。もし、ノイズが本質的なものであれば話は大きく異なってくる。構造変化が内生的に発生しているとすれば、それこそが重要な問題なのである。これらが現実のシステムの非線形性にあるとすれば、それを除外することは不適当なこととなる。

非線形要素を含む仮説によってモデルを作り、このシステムを強いて解いた場合にも同様のことが言える。非線形モデルの解が現実とぴったり符号することとはありえない。するとその理論は反証されたとして棄却されるべきか。非線

形性を考えると統計的な手法での検証・反証は意味を持たなくなってくる。検証も反証もできなければ、統計学的方法によってもよらなくても全く同じことになる。その様な場合に、反証不可能を理由にこれを議論すること自身無意味なこととすることはできないであろう。例えば、非線形景気循環論があるが、これが結果としてぴったりデータと一致することはありえない。そして、現実には経済は極めて複雑な循環を引き起こしている。非線形モデルで出来ることは高々、現実には生じている複雑な動きに似たようなことが数式上でも起こりうることを示すに過ぎない。線形システムで理解できなかったような現象を考えることができるだけでも大きな意味がある。すなわち、ある仮説の結果が経験するところと一致するかしらないかで反証されえなくとも、あるいは、明らかに反証されるものであっても、その仮説が生み出す結果が現実の不可思議な現象の一部でもほじくり出すことができたとしたら意味のあることになる。

結局、現実には存在する非線形現象を理解するために、非線形モデルによって考察することは Popper 的な反証主義の立場から科学の領域に入れるのは難しくなる。これを Poincare 的な規約主義とみるのか、Kuhn 的にパラダイムとして多くの経済学者が受け入れるのを待つのか、Lakatos 的に新しい科学的研究プログラムへの挑戦とするのか別の立場から判断しなければならない。

## V ポパーを越えるもの

ポパーがもっとも強く留意を求めていたことは科学的言明とは「とりあえずの言明」に過ぎないことであり、ポパーが繰り返し述べていたのは、言明の価値の問題でなく、科学と非科学を分ける境界の問題であった。このような科学の方法を提示し、イデオロギーを論争から排除したことは極めて新鮮で大きな衝撃を与えるものであった。経済学への導入が経済学に科学としての立場を与え、その発展に大きな貢献をなしたことは間違いがない。しかし、経済学が制度化するに連れこの新鮮さは薄れることになる。現実には、いわゆる新古典派経済学はポパーの反証主義の立場から極めて明解なスタイルをもってその体制を

作り上げたが、かつて、Samuelson や Hicks の議論が世界の人々からむさぼり読まれたころの魅力はすでになくなっている。すなわち、経済学の革命から新しい体制を作り上げる過程で人々は必死で新しいものを創造する。しかし、一旦できてしまえば、その体制の中での名声を求めて行動するのがまた新古典派経済学の教えるところでもある。すなわち、経済学という疑似科学を少なくとも他の科学と同等の立場にたたすことに成功したことは大きな成果であった。しかし、既に魅力の薄いものになり、経済学がかつての熱気を持たなくなってきた。

一つは、ピースミール・ワークの空しさである。しかし、我々が社会科学に魅力を感じるのは反証可能性に疑義があるとしても全体論的理解、形而上学的直観に依存している。ピースミール・ワークが自己完結的な経済学のための経済学を生み出していることにあろう。科学性の追求は「木を見て森を見ない」ことになってしまう危険が存在する。さらに、近代以降の伝統としての科学自身がその方法的基盤を失いつつあることである。ピースミール・ワークが科学にとってどのような意味を持つかが重要であるが、これを感じるのが難しい状況にある。経済学は一つの世界観であり、体系であることは過去の大経済学者が求めてきたところである。Popper 自身もこの点は強調しており、決して先に述べた方法に賛成していない。Popper (1963) は「科学は総て宇宙論である、……哲学であれ科学であれ、そういった追求をやめ一専門主義となって世界の謎を見るのをやめ、それに驚くことをやめる—とき、すべての魅力がなくなってしまう。」<sup>29)</sup>とする。ポパーは反証可能なピースミール・ワークでなければ科学でなし、宇宙論的全体論を排除してきた。宇宙論的全体論は科学でないことについては多くの人々はポパーに賛同するであろう。しかし、科学的な研究でも宇宙論的全体論と無関係であることはありえない。社会科学は研究者がそれを認識しているかどうかは別にして、何等かの歴史認識の下に立っていることは間違いのないことである。Popper の著作の多くもピースミール・

29) Popper (1963) 訳書222頁。

ワークとは思えない。問題は宇宙論の全体論を科学として議論したことがあったのが間違いであって、それはそれ自身の価値を否定しているわけではない。

第二は反証が知の進歩を生むという考えに対する疑問である。Popper(1959)自身も「科学の歴史において新しい知識への道を開くものはつねに理論であって実験ではなく、つねにアイデアであって観察でないと信じる」<sup>30)</sup>と述べており、批判が知の進歩を生むもののその原動力はアイデアであることを示している。大胆な仮説とその後に続くテストの組合せなのである。しかし、科学性の追求はテストの方法に議論が集中し、科学が矮小化される危険性は少なくない。

こういった点から Popper の議論は批判されてきている。Kuhn (1962) は知識の進化論的發展でなく、パラダイム変換による科学革命を主張し、「通常科学の特徴たる多くのパズルが生じるのは、既存のデータと理論の適合が不完全だからである。適合しないことが理論を排斥する根拠であるのなら、いかなる時代のいかなる理論もすべて排除されるべきである。」<sup>31)</sup>と反証の無意味を説き、「パラダイム間の競争は、証明によって決着をつけるような種類の戦いではない。」<sup>32)</sup>とする。これは大きな論争の流れとなって行く。

Lakatos (1978) は洗練された反証主義; Popper II という考えを示し、「受容規則」であるとする。そして、科学的研究プログラムという概念を提唱し、「創造的想像力は、たとえ、もっとも「馬鹿げた」プログラムであってもその探求が十分な駆動力を持っているならば、そのプログラムを支持する新しい検証的知見を見つけ出すであろう。新しい確証的知見をこの様に探し出そうとする行為は、全く持って許容されているのである。」<sup>33)</sup>と、反証主義の転換を示す。

第三に、そもそも科学というものの自身の魅力が薄れてきている。いわゆる科学は近代西欧のたまたまの方法であって、人類の歴史に普遍的に追求されてきたものでないことが次第に認識されてきているように思える。他の代替的な知

30) Popper (1959) 訳書(上) 332頁。

31) Kuhn (1962) 訳書165頁。

32) op. cit., 167頁。

33) Lakatos (1978) 訳書148頁。



の方法が総て非科学的であって排除されるべきものであるという長年の信念は崩れ始めている。いわゆる科学も一つの文化圏の一つの時代の産物であるという文化相対主義の考えが広まりつつある。

現実には、かつてほど経済学が熱をもって迎えられなくなったことを考える必要がある。経済学が役に立たないとか、限界であるといった議論も盛んに行われるようになってきている。現実の経済分析においてビジネスカルチャーが幅をきかすようになってきている。現場の実務家の議論が強い説得力を持つようになってきている。これは決して経済学が科学的でなくなったからではない。むしろ科学としての体裁を益々完備しているように思える。しかし、これに従って、逆に人々からの経済学に対する期待は小さなものになっている。すなわち、経済学が期待されているものは科学としての完備性は必要条件であって十分条件でない。

従来の経済学は、必ずしも経済の発展の領域を十分にカバーしてこなかった。現実には経済学にとって関心の薄かった問題が急増している。先進工業国では製造業が既に経済活動の三割以下になっており、「もの」を作ることの重要性は相対的に大きく低下している。その製造業でも重要なのはその生産量ではなく製品が体化されたデザイン・技術などの情報になっている。サービス・情報についての経済分析が十分行われているとはいえない。さらに、経済分析が米国経済のものであり、日本経済のものが十分に分析されているわけではない。この様に、一つの体制の確立が構想力の発展を必ずしも生んでこなかったことが問題なのである。

ポパーの反証主義は経済学にとって一つの必要条件であっても十分条件ではない。Lakatos (1978) は「よりよい理論のないところに反証もない」<sup>34)</sup>と強烈な皮肉を述べているが、反証の前に必要なことを強調するものである。それは経済学がより大きな構想力をもっていることであり、経済に関する大きなイメージを創造する力である。経済学にはより大きな創造的構想力が導入される必要がある。

---

34) Lakatos (1978) 訳書12頁。

まず、現実からの構想である。経済学は現実の社会と切り放されて存在できないわけであり、現実即して考え、現実を改革するために経済学があるという伝統もまた重要なのである。科学としての側面は一側面であり、もう一方の側面は現実との交流による経済の解釈である。現実から学ぶことは極めて多く、現実に対する問題意識こそ経済学の出発点であろう。また、他の領域からの構想力の輸入である。過去の経済学は多くを数学や物理学から学んできた。学際的な刺激がより重要になってきている。経済学の科学性と構想力は矛盾するものではなく、両立するものであり、共に必要なものであろう。

そして、既存の発想を越える様々な構想が取り入れられ、議論されねばならない。ニュートンが神の存在を証明するために物理学を始めたり、錬金術に凝ったりしたことは有名な話である。神の存在や錬金術は科学を教えないか、動機付や問題を提出することができる。その意味で科学をもって全てを否定することは適当でない。Popper の立場も境界問題であることに繰り返し留意する必要がある。Popper (1963) は「反証可能性もテスト可能性も、わたしが意味基準として提唱したことなど一度もないのである。」<sup>35)</sup>と人々が反証可能性をもって意味論の問題と受け止められていることに迷惑を訴えている。Caldwell (1982) の「社会科学における方法論的反証主義は、示唆に富む崇高な批判的理想である。もしドクマ的排除装置としてのみその名が呼ばれるのなら、それは悲劇的な誤りであろう。」<sup>36)</sup>という見解には共感を持つ。Popper が反証主義によって生み出されるとして期待したものは思想の自由であり、批判を通じる思想の競争であった。反証不可能な議論を実証科学と混同して議論されれば議論をするだけ無駄なこととなり、宗教としての意味しかたなくなって、密教の教義を伝達することに専念することになる。Popper はこの様な宗教論争の排除を通じて、科学的な論争が活発化することを期待したのである。

この意味で反証可能な形式を持つことは極めて重要である。しかし、問題は

35) Popper (1963) 訳書70頁。

36) Caldwell (1982) 訳書175頁。

反証主義の形式を重んじることによってさまざまな思考を排除することにある。確立された体制に従うことが科学的という認識になっては意味のないことである。それが他の思考を論理でなく形式で排除することになって、知識の革新を妨げることになる。いわゆる経済学の体制化の危険とはその様なものであろう。ポパーのとった厳しい科学主義は不毛な形而上学を排除して、知識の自由競争を促進することにより、科学としての枠組みは多様な構想力の競争をめざすものでなければならない。科学的な分析でありうる形式を持つことの目的は競争を維持し、知識の発展を生み出すことなのである。そして、議論を通して実践としての社会科学の発展を Popper は期待していたのである。また、創造性の源泉である精神を否定するものではなく、精神を発揮するものとしての科学の発展を期待しているのである。

いずれにせよ、Popper の議論に従えば、Popper もまた誤りである可能性を含んでいる。そして、Lakatos (1978) のいうように「科学の歴史はポパーとクーンのどちらをも反証している。」<sup>37)</sup> ことになる。そこで、Popper の議論を形式的に適用すること自身余り意味のないことになる。Popper から学ぶことは科学と非科学に境界を引くことで批判をもって知識を発展させることにあり、形式的な枠をはめることで論争の発展を阻害することではない。

## VI む す び

方法論の論争は不毛であるということがよく言われる。確かに、Popper 流に考えても反証主義は反証可能かという問をあげれば矛盾になる。また、方法論が経済学に新たなアイデアを持ち込んだわけでもない。しかし、過去、多くの経済学者は科学的方法論に興味を持って経済学に取り組んできた。これは自然科学に対するコンプレックスかも知れないが、常に科学たらんことを意識してきたことは重要なことである。経済学は科学としての反省の中で発展することで、科学としての地位を築くべきである。また経済学は現実の経済と離れて

37) Lakatos (1978) 訳書12頁。

存在することはありえないので、そのためにも実証的社会科学の形式を持つ必要がある。しかし、反対に科学的な体裁を持つただけに現実と遊離したものとなる可能性はなしとはいえず、これは排除されなければならない。特に、日本経済が世界経済のなかで大きな役割を果たしつつあることを考えるときに、日本経済のモデルが経済学に取り込まれることが数多くの新しいアイデアを生み出し、新しい経済理論を生むことになる。そのために、経済理論は現実を基に議論される必要があり、輸入学問である伝統的な議論と衝突することも少なくない。この論争は反証可能性の下で議論されることは言うまでもないが、反証可能性の議論だけからは生まれてこない。これは経済学に対する構想力の問題であり、現実の経済をいかにイメージするかという問題である。現実からもっと学ばなければならない問題である。

さらに、現実が理論に取り入れられて行くためにはアイデアの競争が必要である。Popper の指摘するように反証可能性を科学と形而上学の境界の基準とすることで科学の自由な競争を確保されるが、しかし競争を行うためには多様な理論が生まれなければならない。すなわち、科学の自由競争はのために、反証可能性は必要条件であるが十分条件でないことにもっと注目されなければならない。

また、日本の経済学が輸入業者から将来は輸出業者にならなければならない時代において、これまでの経済学体系の見直しを行って行く必要があるのではないか。特に、最近の様にテクニカルなことに対する関心ばかり強くなる風潮の中で常に経済学の根幹にかかわることを意識して経済学研究が進められて行く必要があるものとする。

#### 引用文献

- Caldwell, B. J. (1982), *Beyond Positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century*, George Allen & Unwin. (堀田一善・渡部直樹監訳「実証主義を越えて——20世紀経済科学方法論——」中央経済社, 1989)
- Eichner, A. S. (1983), *Why Economics is not yet a Science?*, M. E. Sharpe Inc.

(百々和監訳「なぜ経済学は科学ではないのか」日本評論社, 1986)

- Friedman, M. (1953), *Essays in Positive Economics*, (佐藤隆三・長谷川啓之訳「実証経済学の方法と展開」富士書房, 1977)
- Kuhn, T. S. (1962), *The Structure of Scientific Revolutions*, The University of Chicago Press, Chicago. (中山茂訳「科学革命の構造」みすず書房, 1971)
- Keynes, J. M. (1936), *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan & Co. Ltd. (塩野谷祐一訳「雇用・利子および貨幣の一般理論」東洋経済新報社, 1983)
- Lakatos, I. (1978), *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Philosophical Papers, vol. 1, Cambridge University Press. (村上陽一郎・井山弘幸ほか共訳「方法の擁護——科学的研究プログラムの方法論——」新曜社, 1986)
- Leijonhufvud, A. (1966), *On Keynesian Economics and the Economics of Keynes: A Study in Monetary Theory*, Oxford University Press, Inc. (根岸隆監訳「ケインジアンとケインズの経済学」東洋経済新報社, 1978)
- Popper, K. R. (1950), *The Open Society and Its Enemies*, Princeton University Press. (小河原誠・内田詔夫訳「開かれた社会とその敵」第一部, 第二部, 未来社, 1980)
- (1957), *The Poverty of Historicism*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London. (久野収・市井三郎訳「歴史主義の貧困——社会科学の方法と実践——」中央公論社, 1961)
- (1959), *The Logic of Scientific Discovery*, London Hutchinson. (大内義一・森博訳「科学的発見の論理」上・下, 恒星社厚生閣, 1971)
- (1963), *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London. (藤本隆志・石垣寿郎・森博訳「推論と反駁——科学的知識の発展——」法制大学出版局, 1980)
- (1972), *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford Clarendon Press. (森博訳「客観的知識——進化論的アプローチ——」木鐸社, 1974)
- Robinson, J. (1962), *Economic Philosophy*, C. A. Watts & Co., London. (宮崎義一訳「経済学の考え方」岩波書店, 1966)
- (1971), *Economic Heresies*, Basic Books. (宇沢弘文訳「異端の経済学」日本経済新聞社, 1973)
- Samuelson, P. (1947), *Foundations of Economic Analysis*, (佐藤隆三訳「経済分析の基礎」勁草書房, 1967)
- 佐和隆光 (1979), 『経済学の世界アメリカと日本』東洋経済新報社。
- (1981), 『経済学とは何だろうか』岩波書店。
- (1986), 「夢と禁欲」, 浅田他著『科学的方法とは何か』中央公論社。